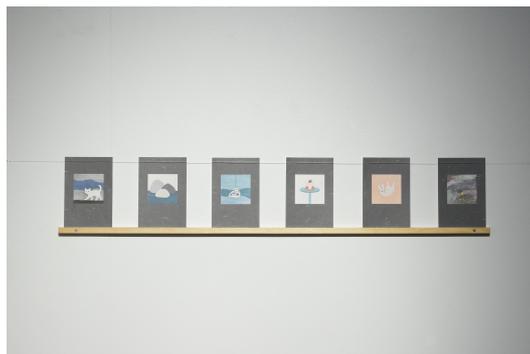
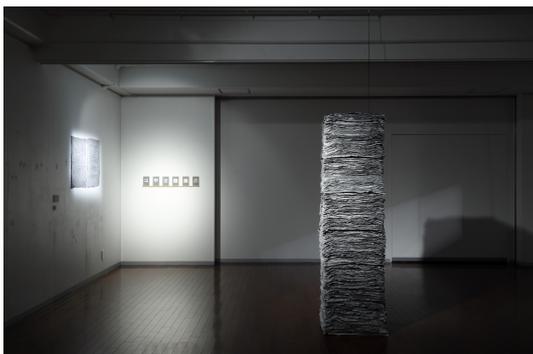


デザイン専攻 アートプロデュース研究領域

ラ セイ

## 羅 声



## スイートいしづみ

インスタレーション、活性炭、ベッドシーツ、発泡スチロール、  
アクリル絵具、ケブラーコード

## スイートいしづみ

本研究および制作は、作家リン・イーハンの小説、およびそのあとがきに記された私的な経験に着想を得た立体作品《スイートいしづみ》である。彼女の遺作となった小説『房思琪の初恋の樂園』（白水社、2019）と、そこに付随する「静かに反復される痛みの蓄積」という特質を、いかに物質として可視化できるかが本制作の主眼である。

制作においては、小説のあとがきから抽出した「活性炭」と「ベッドシーツ」を主要素材として採用し、活性炭によって黒灰色に染まった布を重ねることで、碑を想起させる重量感と物質性を備えた立体を構築した。布を反復的に積層させる身体的所作は、終わりなき苦痛の反芻であると同時に、時間をかけて痛みを物質へと置換していく過程でもある。この執拗なまでの反復を通じて、目に見えない精神的な苦痛を、誰もが触れることのできる彫刻的なヴォリュームへと転換することを目指した。立体の内部には六点の絵画が配置されている。そこに描かれたモチーフはいずれも、リン・イーハンが小説やSNS等で言及していたものであり、一見すると厳かな佇まいを見せる構造体の内部に、死者の記憶と流動的な「魂」を呼び込むことを意図している。

当初は布のみによる構成を企図していたが、実制作の過程で生じた過度な重量という物理的制約に対し、発泡スチロールブロックを芯材として組み込む構造的転換を行った。発泡スチロールは、構造的な安定性を確保する支持体として機能する一方で、素材そのものは極めて脆弱な性質を持つ。この素材の導入は、強固で重厚な痛みの深層に、救いがたい脆弱さが潜んでいるというメタファーを作品に内包させることとなった。

本作は、以上のプロセスを通じて、理想的な表現と現実的な条件の間に生じる「妥協」を否定的なものとしてではなく、思考や生の持続を可能にする行為として捉え直す試みである。制作過程そのものを内包することで、痛みとともに生き続けるための一つの態度を作品として提示している。